

## 伝説は歩く

辻 憲男（文学部教授）

謙作は城とお菊神社を見てまわった。静かな夕もやの中、白壁の城は老松の上に遠く大きくそびえ立っていた。お菊虫を買った。お菊の怨霊が虫になり、毎年秋の末に境内の木の枝に下がる、まるで「口紅をつけたお菊が後ろ手に縛られて、釣り下げられたところ」に見える（志賀直哉『暗夜行路』）。ジャコウアゲハという、羽根の大きな蝶のサナギである。元禄の皿屋敷の話から百年ほどたって、「お菊虫」が大量発生した。姫路では長く、このサナギを薬で処理して、お守りとして売っていた。

怪談は、家宝の名皿十枚の一枚が割られ、お菊が濡れぎぬを着せられて井戸に投げ込まれ、以来井戸から皿を数える怨み声がするというもの。地誌集『播陽万宝智恵袋』の中の「播州皿屋敷」では、時を16世紀初めとし、青山鉄山の主家乗っ取りの悪計をお菊が知り、後半で、お菊の妹花鳥と花月が鉄山一味に復讐をとげる、勧善懲悪（かんぜんちょうあく）の物語になっている。

伝説は姫路、江戸の番町のほか、兵庫県佐用、尼崎、岸和田、宮津、松江、福岡県嘉麻、長崎県福江など全国に広まっている。高知県西土佐の「お滝」は井戸ではなく滝に飛び込んだ。これを姫路の巡礼者が聞いて帰り、自国の話にしたのだという。ただし柳田国男の『伝説』によると、前の時代には美しい下女がいじめにあい、後にその苦しみを観音や地藏に救われるという語りごとがあった。されば、信心のうすれた後世びとは、おそろしい幽霊話をつくって罪つぐないにしたのでもあろうか。



姫路城内のお菊井戸。柳田国男は姫路の北・福崎町の生まれ、  
“私のくには井戸もありお菊虫もいる”。